

「鐘の鳴る丘」世代とアメリカ

廃墟・占領・戦後文学

勝
又
浩



アメリカは破壊者だったのか、
救済者だったのか。

昭和20年代に人気を博したラジオドラマ「鐘の鳴る丘」。
この戦災孤児たちの物語は、占領軍の指示でつくられたものだった——
「鐘の鳴る丘」への長年の親しみは幻影だったと気づいた文芸評論家が、
現代につながるアメリカ占領の意味を、自らの半生と戦後文学に探る力作。

白水社



9784560081891

ISBN978-4-560-08189-1

C0095 ¥2500E



1920095025001

定価(本体2500円+税)

白水社



取り上げている作品：石川淳『焼跡のイエス』 坂口安吾『墮落論』 中野重治『軍楽』
田村泰次郎『肉体の門』 マーク・ゲイン『ニッポン日記』 丹羽文雄『恋文』
久生十蘭『母子像』 島尾敏雄『夢の中での日常』 小島信夫『抱擁家族』
大城立裕『カクテル・パーティー』 大江健三郎『人間の羊』
三島由紀夫『女は占領されない』 内村直也『沖縄』 大庭みな子『トーテムの海辺』
村上龍『限りなく透明に近いブルー』 山田詠美『ベッドタイムアイズ』
井上ひさし『東京セブンローズ』 リービ英雄『日本語の勝利』 島田雅彦『退廃姉妹』
池澤夏樹『カデナ』 中島京子『小さいおうち』他